

外傷性脳損傷ハンドブック

診断と治療・評価・後遺症の管理
現場で役立つ臨床マニュアル

アルシニェガス、ザスラー、ヴァンダーブローグ、ジャフィ【編】
松村 明【総監訳】
羽田康司、丸島愛樹【監訳】

評者

鈴木倫保

山口大学医学部先進温度神経生物学講座

この度、筑波大学脳神経外科学教授の松村明先生の総監訳による本書を拝読する機会を得て、目から鱗が4, 5枚落ちた。本書は、正に本邦脳神経外傷治療の欠落点、即ち外傷性脳損傷(TBI)後のメンタルヘルス・リハビリテーションの問題を長年にわたり悩み抜いた訳者の方々が、米国のアルシニェガスを中心とした編者らによる治療マニュアルを紹介することによって、欠落点を埋め直す取り組みと理解された。その内容がTBIの急性期病態や治療の項目がごく僅かである事に驚かれる読者も居られよう。しかし、編者が大部を割いて記している、TBI慢性期の認知・感情・行動・感覚・運動障害の疫学、評価、治療こそが本邦においては、これまで等閑にされていた欠落点であった。更に、それらによって二次的に引き起こされる精神的・社会心理的なメンタルヘルスの悪化は、言わずもがなであろう。

TBIに立ち向かう救急医や脳神経外科医は、急性期治療を100%行えば、患者を外来で自分たちが診る必要は無いと考えているだろうが、患者や家族にとっては急性

期病院を退院したその日から、長い長い慢性期の治療が始まることを思い起こす必要がある。読者も脳神経外科医や救急医等の急性期の医師ばかりでは無く、リハビリテーション・精神科等慢性期治療に携わる医師、及び看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、臨床心理士、心理学者等の多職種を対象としており、大変わかりやすく記載されている。そのために、世界中で新たな公衆衛生学上の大問題としてクローズアップされているTBI慢性期治療に携わる本邦の医療従事者にとっても、大きな福音となるだろう。

我々が銘記すべき事は……
「TBIは常に眼前にあり、時の流れで姿を変えることはあっても、消滅することはない」ことであり、先進国、超高齢国としての我が国のTBIの変化を認識し、きちんと対策を実践することが重要課題と考える。実際に日本脳神経外傷学会の日本頭部外傷データバンク(Japan Neurotrauma Data Bank [JNTDB])からは、直近30年間における1)高齢化、2)GCS3-8の重症例の有意な減少、3)びまん性損傷の減少と占拠性病変の有意な増加、



4)交通事故の減少と転倒・転落事故の有意な増加が既に報告されている。またそれを補完する全国横断的なOne Week Studyでは、軽症(GCS14~15):77%(525名)、中等症(GCS9~13):9%(61名)が大部分を占めており、軽症例の半数に多彩な脳振盪後症候群を呈することも指摘されている。本書でも高齢者、スポーツTBIと脳振盪、脳振盪後症候群が詳述されている。最後に司法医学の章が設けられているが、米国の状況に即して述べられているので本邦の状況とは異なる。しかし、法曹の在り様が激変している我が国で、その未来を考慮すれば大変興味があり参考となるだろう。

本書が、皆様の明日からの臨床にお役に立つことは間違いない。

Covid-19が全世界を蹂躪している2020年3月22日記す。

A5判・頁428

2020年1月

定価: 本体8,800円+税

[ISBN978-4-86706-004-9]

西村書店刊